



# 清水 良

SHIMIZU Ryo

田辺三菱製薬執行役員  
デジタルトランスフォーメーション部長

## ヘルスケアにおけるデジタル化の流れ ～データの活用で、 新たなソリューションの創出へ～



コロナ禍によって、世界的にデジタルトランスフォーメーション(DX)が一気に進みつつあると感じています。その過程で、DXが単にリモート・遠隔での作業を可能にするだけのものではなく、多くのデータを集めて解析することで新たな変革をもたらす重要なものであるということが再認識されたのではないでしょうか。

日本でもいま、産業界はもとより社会全体がDXによって大きく変化しようとしています。ヘルスケア分野では、「個人起点のヘルスケアのDX」が注目されています。これは、患者さんの情報を個人ベースでとらえられるようになってきたことが大きいです。例えば、これまで月に1度かかりつけ医に行った際の診察・検査結果だけが医療情報として蓄積されていたのが、別の病院で受けた検査の結果に加え、普段の生活のなかで取られた健康関連のデータも同一人物の健康・医療データとして統合して蓄積され、必要に応じて確認できるようになれば、その方に最適な医療を受けられるようになります。

さらにデジタル化が進めば、病気になった後の治療だけでなく、発症前の予防や健康維持、そして予後管理も含めた大きな意味でのヘルスケアが実現するでしょう。こうした流れにあわせて、医薬品業界も治療手段としての医薬品の提供に主軸は置きつつ、病気の予防も含めた健康維持のためのソリューションの提供にも役割を広げていこうという方向に変わりつつあります。

健康・医療データのビッグデータ化やその活用が進むのは素晴らしいことなのですが、現状このようなデータの扱いには大きな課題があります。諸データの規格がバラバラで、一企業ではその統一が不可能なことはその一例です。個人情報の保護とビッグデータの解析をどのように両立させるかも難しい問題です。

これらの課題を解決していくために求められるのは、皆さんのが安心してデータを預けられる信頼ある存在です。「デジタルトラスト」という言葉を耳にしますが、「データを預ける信頼感」と「得られるデータの信憑性」、両方を満たすような受け皿を作っていくかが重要になります。それができてこそ、健康・医療データがヘルスケア分野の新たな産業基盤となり得るのだと思います。2025年の大阪・関西万博がいい流れを作るきっかけとなればと期待しています。

関西には以前から医療分野の優れた研究機関や医薬品産業が集積していましたが、これまで医薬品業界は他の業界とあまり連携していませんでした。しかしデジタル化が進むことで、ヘルスケアの概念が健康・医療データに基づいて健康の維持や回復をはかるという、従来の医薬になかったカテゴリーにまで広がろうとしています。そうなってくると、関西地域が持っている健康・医療系の基盤やインフラは、実はさまざまな業種の企業がヘルスケアに取り組むにあたっての素地になり得るのではないかと思っています。業種を越えた連携を推進していくけば、新たなビジネスの創出につながるのではないかでしょうか。拝命している関経連の健康・医療専門委員長としても取り組みたいと思います。

新型コロナウイルスを何らかの形で克服する時期が必ずやってきます。この大きな変曲点を通過した後の世の中は、データ活用やデジタル化がさらに進み、より健康な時代になるのではないかとみています。関西の人間としては、大阪・関西万博が、人類がコロナを乗り越えた後の大きな祭典となり、関西に良い効果をもたらすことを期待しています。

(談)